

【レポート】

21世紀の社会保障にむけて

横須賀基督教社会館長 阿部 志郎

神さまが人間を含めた動物の寿命を30年にしようと考えられたとき、最初にロバがやって来た。そして30年と言われると、とんでもない、30年は長すぎる、30年生きている間の苦勞をお察しく下さい。朝から晩まで重たい荷物を運ばなければならない。ぶったり蹴られたりして、しっかりしろ、しっかりしろと引き立てられるばかり。それは辛いことです。どうか長い年月をお減らしくださいと言うと、神さまはかわいそうに思って、ロバに18年の寿命を与えました。

するとイヌがまいりました。30年でどうかと神さまが聞かれると、否応なしにどれくらい走らなければならないかを、憐れんでください。30年も足が続くものではない。ほえる声をなくし、食いつく歯をなくしたら、隅の方でウーウーうなるばかりで、何の能もありません。それは苦しいことです。それを聞いてもっともと考えられた神さまは、イヌに12年の寿命を与えました。

サルがやって来て、30年生きたいだろうかと、神さまに聞かれました。イヌやロバのようにお前は働かなくてもいいのだから。とんでもありません。うわべはそうですが、いつでもおかしい仕事をしたり、変てこな顔をしたりして、人間どもを笑わせなければならない。道化の後ろには悲しみが隠れています。30年はとても辛抱できませんと言うので、神さまはサルに10年の寿命を与えました。

最後に現われたのが人間です。30年生かしてあげようと神さまに言われると、人間は短いですねと、大きな声で答えました。自分の家を建て、家族を養うために自分のかまどで火を燃やして、それから木を植え、その木に花が咲き、実がなって、これからやっと自分の生涯を楽しもうと思う矢先

に、もう死ななければならんというわけですか。寿命を延ばしてくださいと、神さまに頼みました。それではお前にロバの18年を足してやろうと言うと、それでも足りませんと言いました。よしイヌの12年もあげることにしようと言いましたが、まだまだ少なすぎると言うので、よろしいそれではサルの10年もお前にあげよう、もうそれ以上はあげられないぞ、と神さまは言われました。そこで人間は不平たらたら立ち去りました。

こんなわけで人間は70年生きるようになっていきます。はじめの30年は人間の本当の年である。この30年はさっさと過ぎてしまう。この間は人間は体が健やかで、気が晴れ晴れしく、面白おかしく働いて、生きることがいかにも嬉しい。これに続いてくるロバの18年は、あとから、あとから重荷を背負わされる。人間はほかの者達を養う麦をかつがなければならず、ぶったり、蹴ったりが、一生懸命に働くことに対するお礼なのである。その次に来るのはイヌの12年で、人間は隅っこに転がってウーウーとうなっているばかりいる。もう食いつく歯もなくなっている。この時期がたつと、今度はサルの10年がやってきて、これで打ち止めになる。この年になると人間は頭の働きはにぶく、とんでもない愚かなことをやって、子供達のいい笑い草になる。

これはグリム童話集に出てくる話である。私はロバ、イヌの年を過ぎて、実は最後のサルの10年に入っています。頭がにぶくなって、皆さんに笑われたくないと思うので、ごく簡単に考えていることを申し上げたい。グリム童話はグリム兄弟によって170~180年前に書かれたものであるが、この中から私はいくつかの示唆を現代的なコンテキストの中で、受け取っています。

1945年に日本人の寿命は、50歳に達していなかった。それが1960年に70歳になった。神さまが与えてくれた寿命に到達をしたわけだが、さらに欲張って、いま人生は80年時代と言われている。男74歳、女80歳の寿命を突破したのは、日本ただ1国である。経済の成長、社会保障、医学の進歩、あるいは栄養の改善、出生率の低下、その他いろいろの原因があるかと思うが、ある意味では動物の犠牲において、私どもが延命をはかってきたこともたしかであろうかと思う。

この背後にキリスト教思想の影響があることを見逃すことができない。神さまが動物、植物を人間に「治めさせよう」と、創世記で言われている。この治めさせるというのは、英語で言えばドミノンの意味のようだが、いわば統治権、主権といったことになる。これを動植物に対する支配と受け取り、自然の征服と考えるようになったと言えよう。社会保障思想は、その文脈の上に推進をされてきたのではないかということ、考えさせられる。

ようやく30年ぐらい前から自然を支配する思想から、これは本来自然の管理をゆだねられたのではないかという考え方に変わってきた。環境破壊は、管理権の過剰行使ではないかという反省が生まれてきた。ここから環境を守る運動が起こってきたし、一面においては捕鯨禁止というような、日本にとっては大変厳しい動きさえ起こってきた。

日本の文化を考えると、自然を庭園に取り入れるというように、自然を征服するよりは、自然を畏れ、自然との調和を求めてきたのではないか。たとえば合掌造りという家の建て方がある。これは合掌から出たわけだが、合掌は自然の恵みに対する感謝の表われである。それは一例だが、日本も今日、経済成長、産業化による公害とか、産業破壊で、住民の意識は激しく揺れ動いている。

栄養の摂取、動物による実験、あるいは医薬品の使用に現われるように、医学の発達を前提として、社会保障を可能にしてきたのではないか。

社会保障思想を生み出してきた狩猟民族を背景とするヨーロッパの文化、あるいは慈善とかチャリティーという行為、さらに、資本主義社会を土

台にして出てきた、社会理想主義的な思想が背景にあると思うが、こうした中から育ってきた社会保障を受け止める日本の文化はいったいどうなのか。講集団、あるいは報徳思想、あるいは三浦梅園の思想といったような、さまざまな日本が生み出した思想があるが、それは限られた地域での互助を進めているが、社会的な広がりを持ってないところに、日本思想の問題があるのかと思う。肉食をしなかった日本の伝統的な文化と、社会保障を生み出してきた西欧の文化とが、どこで折衝するか。この問題は一度は考えていかなければならないのではないか。その接点をどこに求めるかが1つの課題ではないかと私は考えている。

第2に、いま70から80歳と、延命をしてきたが、他方いまだに平均余命40歳に満たない国もある。80歳の生命を維持するのに、動物のみならず、人間同士が生命を奪い合うということが結果的に起こっているのではないか。途上国と開発国の人口は、だいたい75対25ぐらいだと思うが、今世紀の終わりにはそれが83対17ぐらいになるようである。にもかかわらずエネルギーで言うと、途上国が15、開発国が85を押さえているので、飽食と飢餓という対照的な現象が起こる。すなわち途上国の犠牲のうえに、今日の日本の成長と繁栄、さらに社会保障が成立しているということになるのではないか。

動物と人間の違いは優勝劣敗の原理を克服する可能性が、人間に与えられているところにある。社会保障は動物的な弱肉強食を超えた連帯の社会的な表現である。それは人間の社会的な在り方として、望ましい方向に進んできたと言ってよい。しかしながら国際的には依然として、社会保障制度のおかげで延命できる国と、社会保障制度を持たずに、早死にしなければならない国とに分かれている。日本を中心に考えると同時に、グローバルな視点から、日本の位置と、役割と、責任を改めて認識をしなければならない。これが21世紀に向けての国際化の問題ではないかと、私は理解している。

動物はその家族とか、群れという、集団の中で生きているが、人間は人種、民族、国家を超えて

連帯しうるのかどうか。その連帯をいかに具現化しうるのか。社会保障はその表現の手段たりうるのかどうかという問題である。社会保障の持つ普遍性は、1つの国、あるいはせいぜい北欧圏といったリージョンで適応できるという範囲に限られるのか。それとも世界大の普遍性を持ちうる原理であるのかどうか。

ともあれ、さしずめ途上国援助に力を入れなければならぬのではないかと考える。

第3に、高齢化社会がだんだん進行をしてきて、ロバや、イヌや、サルが言うように、「辛く、苦しく、悲しい」人生に、私どもは直面をしなければならない。特に1965年以降、さまざまな老人をめぐる現象と問題が起こってきた。独り暮らし、孤独死、寝たきり老人、ボケ老人。ボケは50万人前後である。それから老人の自殺、あるいはインビジブルであるが孤独といった問題がある。そして独り暮らし老人は、1965年頃には約40万人と言われていたが、現在すでに113万人を数えている。夫婦のみの世帯が100万近くになっている。

ところが開発途上国をみると、老人の苦しく、悲しい人生は、あまりないようである。途上国には私どもが悩んでいる脳死とか、安楽死とか、ターミナルケアとか、ホスピスといった問題意識はまだ表われていない。そこではいかに生きるかは問われても、どのように死ぬかは問題になっていない。いま関西方面を中心にして、ポックリ寺がはやっている。下の世話になりたくない。特に嫁の世話になりたくない。ポックリ死にたいという願望である。バスを連ねてポックリ寺にお参りしたある老人会が、お参りを終えて三々五々バスに戻ってくる途中で、1人の老人が道端で倒れた。文字どおりポックリ亡くなった。そのとき同行していた老人達の反応は、「効き目が良すぎる。ポックリ死にたいが、もう少し長生きしたい。できることならば路上ではなく、畳の上で死にたい」と、言ったそうである。

1950年、95%の子供は家庭で生まれている。現在99%の子供は病院で生まれている。1950年に9割の人々は家庭で死んだが、いまは約8割が病院で死んでいる。こういう現実があって、畳の上で

は死ねないし、死んでいない。しかし畳の上で死にたい。これが在宅福祉サービスが登場しなければならなかった、1つの背景ではないかと思う。

途上国では畳の上で、畳はないとしても、畳の上で死んでいる。ポックリ信仰が現われる余地はない。途上国には制度としての社会保障はない。しかしある意味で家族の中に、地域社会に社会保障機能が働いているのではないか。私達は社会保障制度の拡充であるとか、あるいは見直しに忙殺されているが、社会保障をいかに機能させるのか、機能させるべきであるのかについて、いま一度途上国から学ぶべき課題があるのではないか。

第4に、動物は子供を育てるが、親の扶養はしない。人間は子供も親も扶養する。そこで将来の扶養の担い手である年少人口、子供達の中に起こってきた問題を、私どもは考えなければならない。人口が減ってきている。私が子供のころ年少人口は、だいたい36%であったが、もうすぐ18%になりそうである。約半分の比率になる。校内暴力とか、いじめとか生活の質的变化が起こっているし、もう1つ子供の体力、体位という問題がある。いま言われているのは、「立てばグニャリ、座れば居眠り、走ればポキリ」ということで、私のいる神奈川県で言うと、小学生の体力、体位を測定するのに7種目があるが、そのどれを取っても全国平均に及ばない。神奈川県の男の子の平均が反復横跳びについては、全国平均の女の子に達しない。また神奈川県の学校で起こっている骨折災害が年間1万件近くあり、文字どおり走ればポキリである。こうしたことをどうするのかに迫られている。

きのうのレーガン大統領の一般教書を読むと、子供の非行とか、自殺とか、家出とかという家族的な問題がウェルフェア・カルチュアの中で起こっていると言ってる。いわばウェルフェアの責任であるとも取れる。むしろこれは産業社会化した、文明病的な症状としてとらえることができと思うが、こうした構造的な変化とともに、価値観の変化が、明らかに起こっている。

「親孝行をした い ときに親はいない」と言ったが、いまは「親孝行をしたくないのに親がいる」と言われているし、「老いては子に従うな」とさ

さやかれている。私の友人が娘と孫を連れて電車に乗った。電車はすいていたが、孫が「お爺ちゃんあっち」と言っ、指したところがシルバースート。いまは老人と家族、老人と子供とを切り離す社会の仕組みを、子どもがつくっている。それはその証左ではないか。1984年度の総務庁の15歳から23歳までの青少年調査によると、「どんなことをしてでも親を扶養する」と答えた青年は25.5%である。今年の1月16日の経済企画庁の東京、横浜の主婦の意識調査では、老後は夫婦2人だけで生活をしたいと答えた主婦が67%に達している。子供の仕送りに期待をする主婦は、わずか1%で、収入の期待は81%が公的年金に寄せられている。

こういうように老人が自立、自助していく方向が望ましいのか。同居率が65%に落ちていることをどう考えるか、老人を扶養する意識が低下してくるといったいどういうことになるのか、そもそもなぜ人間社会において、老人を扶養しなければならないのかという理念と哲学を明らかにすることなしに、他人の生活にかかわる福祉は成立しないし、社会保障も崩れる危険性があるのではないか。

5番目に、動物と人間の違いの1つは、人間には笑いがあることである。これは文化と言ってもいい。特に文化が高くならなければ、スマイリングはできないと言われている。動物は下を向いてエサを求めて歩く。エサが目的化される。しかし人間にとってエサ、パンは手段にすぎない。人間にとって社会保障もまた手段的な存在であろうかと思う。人間は延命に努力して、齢80歳に達した。しかしその80年人生をいかに生きるかという中身の吟味を怠ってきたと言わなければならない。人間=アントローposとは、上を仰ぎ見るという意味だが、いかに上を仰ぎながら主体的に生き、またいかに死ぬか、これが今日の問題である。いままで十分にそれを考えることがなかった。きのうの新聞に「子供は食べあきた、老人は生きあきた」という風刺が載っていた。植物状態になっている患者がいま7,000名いる。これは12年の間にその数が3倍に増加をしている。60%以上の人60歳以上である。死ぬに死ねない現実がある。

人間に笑いがあるということは、笑いを生じさせる何かがあるはずである。人生の持つ喜び、感謝、希望、誇り、生き甲斐、満足、あるいは挫折からの回復とか、使命感といったものがそこにはあるはずである。人間ただ生きるのではなく、よく生きたいという価値観を持っている。より良く生きたい価値の世界があることが、人間の特徴なのではないか。

社会保障は生存権の保障だが、いったい80年人生を良く生きる、その生き方をどのように支えようとするのか。現在子どもが持っている社会の仕組みは、50年人生を土台にしている。せいぜい60歳が編成の原理ではないか。80年人生は、50年の延長線上にあるのではなく、それは質的に異なったライフサイクルを持っている。80年人生を支える社会的システムをつくらなければならないというのが、社会保障の1つの課題であり、また同時にそれはすぐれて文化の問題ではないかと思う。

価値観の問題に関連して、福祉について、6番目に問題を1つ出したい。価値観の問題、意味の世界には社会保障は踏み込まない。社会福祉もそれを避けようとしてきた。何らかの基準を設定して、それに該当するかしないかに仕分けをするところに、福祉の方法があった。しかしこれからの福祉は、価値の世界に入り込んでいかなければならないのではないか。それを私は実感として持っている。

私自身地域で仕事をしてきたが、福祉を私は機能的にとらえてきた。体が弱ければ病院へ、金があれば福祉事務所へ、家族がいれば老人ホームへ、こういう画一的なサービスを、制度との結びつきにおいて提供する考え方があったが、老人ホームには行きたくないと拒否する老人もいる。どうしても老人ホームには入りたくない。もちろん畳の上で死にたい。家族がいれば家族に囲まれて死にたい。しかしそれ以上に老人の中に秘められた心情を、私は察するようになった。自分が老人ホームに入ったら、いったい誰が墓を守ってくれるのか、仏壇にある先祖の位牌に、誰がお線香を毎日上げてくれるのか、こういう仏壇とか、寺とか、墓に密着する問題が心の底に残っているの

を認識できるようになった。これは老人の情感に属する問題である。

私の施設で老人の給食、ならびに配食サービスを過去12年間行っている。対象は独り暮らしと、寝たきり老人である。この中から予期しない成果が表われてきた。生活保護を受けている独り暮らしの老人の葬儀は、葬祭扶助では、なかなかお坊さんも来てくれない。ごく少数の人が集まって、さびしい葬儀を出すわけである。ところが給食が始まって、歩ける老人が集まってそこで食べるのだが、そこで知り合った仲間の老人達、それから民生委員とか、ボランティアの人々が、老人の誰かが亡くなると、みんなが集まってきて、別れを惜しむ。いままで2人か3人で野辺送りをしていた葬儀が、70人、80人という人々が集まって、盛んな葬儀が行われる姿を見て、老人達の心がどれだけ豊かにされ、それによって生きる張りが与えられたかわからない。そしてこうしたことが同時に、住民にとって独り暮らし老人を認識する契機にもなっているのを見て、これは予期しない成果であったと、私は心の中で喜んでいる。

住民の感情の中には、独り暮らしの生活を敬遠する気持ちがある。特に老人の場合に独り暮らしは偏屈で不潔だという先入主もあるし、第1ボヤが出たらどうするか、孤独死されたら困るということで、家も部屋も借りにくい事情がある。こうした状況の中で独り暮らし老人は、大変だろうという同情があって、給食サービスという形になったわけである。しかし独り暮らし老人達を見ていて、私の気持ちはすっかり変えられて、今日では独り暮らし老人が持っているしたたかさに脱帽したい気持ちがある。

独り暮らし老人の問題は、もちろんわがままで、頑固だからということで、嫌われる面があるが、もっと深いところで老人というより、人間は、家族とともに生活をすべきものであって、家族を離れて1人で生活するのは不自然であるとする一般的な感情がある。日本的な家族観というか、住民感情に独り暮らし老人が苦しめられていることも事実である。これは先ほど言った日本文化の問題でもあろう。人間をあくまでも1人の人格として

とらえるか、あるいは世帯単位として家族と不可分にとらえるのかは、社会保障制度にもつながる問題であるに違いない。

独り暮らし生活の形態を許容するには、住民の意識の変容を伴わなければならない。そうした中で社会福祉が単なるサービスを供給、住民をどこまでも保護対象として位置づけるということで終わってしまっているのかという疑問を私は持つようになりました。住民の情感の世界、価値変容にいかに対応していくかに福祉、特に地域福祉の課題があるのではないかと考えるようになったのである。

21世紀がどうなるのか、私には見当もつかないが、情報化、高齢化、国際化の進行は明らかだと思う。そうした中で新しい豊かさというか、経済的な豊かさだけでなく、全体としての豊かさ、よく言われるクオリティ・オブ・ライフを追求する社会になっていくと思う。価値が相互に関連し合う複雑な問題状況の中で、情報化が進行してくる。多様になればなるほど、選択する能力と、判断が求められてくる。いわば価値観が多様化する社会になるであろう。そういう中で生涯学習が重要な課題になってくる。情報化とは、いま持っている情報がすぐ古くなるということなので、生涯学習の必要性があるのだが、現在福祉教育をどうするか、特に、専門福祉教育をどうするかが、1つの問題として出ているが、生涯学習というと学校教育プラスのサムシングという形で考えてきたが、おそらく21世紀に向けての生涯学習は、生涯学習の一環として、学校教育あるいは専門社会福祉教育をとらえなければならない。それは、教育体系の再編成を求めることになるのではあるまいか。

地方の時代はいっそう推進され、民間活力も強調される社会になると思うが、地域はますます重視されることになろう。そして国際的な相互依存は深まり、高学歴化も進行する。あるいは産業構造の変化で、第3次産業は増加し、生活構造の変化も起こってくる。人間の寿命が21世紀になって、ある説によると究極的には130何歳まで生きられるということだが、81歳になるのか、82歳になるのか、実際には相対的な加齢にすぎぬと思うし、

あるいは昭和2桁はとても長生きできないということかもしれない。いずれにせよそうした中で社会保障の受益者が増加し、負担者が減少することは明確である。

国民1人1人の意識が制度を支えることなしには、社会保障もまた成り立たない。先ほど言ったレーガンの一般教書は、福祉を削って国防を強化するというのが新聞の見出しになっているが、なぜ社会保障を縮めるのではなく拡充しなければならないのかという理論と、福祉のロジックを築くことは、緊急な課題だと思うが、のみならず社会保障を築き、推し進めていくエートスを、つくり

出し強化していくことが必要なのではないか。福祉社会への道を歩むか、反福祉的な社会を選ぶか、それは21世紀へ向けて、いま別れ道にある。21世紀にいたる短い時間に、そういう非常に重要な課題に取り組まなければならないのではないかと、私は考えるものである。

このあとお2人の学者が学問的な報告をなさる、私は前座であるので、時間を若干残して、余命ではないが、時間をお2人の先生にお回しすることが、私のシンポジウムへの貢献であろうかと思うので、よろしく願いたい。

【レポート】

社会保険ニーズの変化

——労働のサイドからの問題提起——

信州大学教授 高 梨 昌

ただいま阿部先生から大変高邁なお話をうかがいましたが、私は労働経済学の面から、ご案内しましたテーマについて、私が日ごろ考えていることを、皆さん方にご披露をしたい。

日本の社会が21世紀に向けて高齢化、女性化、情報化、国際化といわれますように社会経済環境の変化の時代を迎えている中で、社会保障制度がどのようなインパクトを受けるのか、これを労働サイドの面から、問題提起してみたい。

ご承知のように老齢年金制度は——いま国会で年金法の改正として進みつつありますが——年金財政の収支の均衡を図る必要がありますが、社会的公的年金の負担能力に限界があれば、年金給付に伴う支出を削減する以外にない。そのためには収入に伴う労働に、可能な限り就く期間を長くし、年金給付開始年齢を高齢化させることが必要である。つまりここでは産業社会が高齢者の就業もしくは雇用可能な上限年齢を、どこまで高めることができるか、また政府はそれを政策的に支援す

ることができるかという課題が、ここに提起されていると思う。

また日本の高齢者の特徴ですが、どの意識調査を見ても、かなり就業意欲が高い、つまり働くことに喜びを感じている高齢人口が大変多いということです。これは社会の活性力を維持するうえで、大変望ましい状況であります。この高い就業意欲を社会的、経済的に、どこまで充足できるかということが課題となる。

以上言いました年金の財政負担能力、産業社会での雇用機会の提供能力、それから高齢者の就業意欲、これらのすべてを満たす年齢が高ければ高いほど望ましいことになります。差し当たりいまの政府の政策目標としては65歳が、労働からの引退年齢として線引きをされている。これを70歳まで持っていけるのか、持っていけないのかはともかくとして、差し当たりは60から65歳に、どのように就業可能年齢を、特に雇用労働分野で引き上げることができるかということが目標であって、